

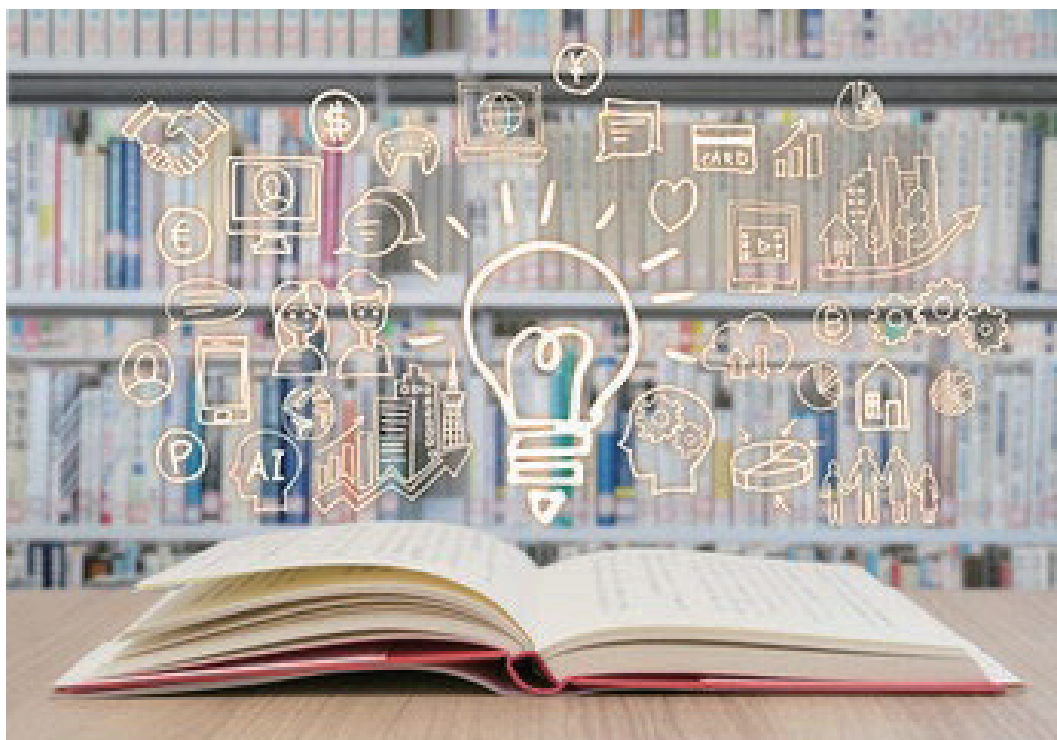
2024年度

北九州市立大学 FD活動報告書

FD研修報告

授業のピアレビュー報告

特集記事「各学部・学群で実施される特色ある演習科目」



2024 年度 FD 活動報告書

目次

1. はじめに	1
2. FD 研修報告	
(1) 春季新任教員 FD 研修	3
(2) 夏季新任教員 FD 研修	6
(3) 第 1 回 全学 FD 研修「大学教育における生成 AI 利用 実践編」	9
(4) 第 2 回 全学 FD 研修「8 つの問いから考える学習評価の改善」	12
(5) メディア授業 FD 研修	15
3. 授業のピアレビュー報告	
(1) 概要	19
(2) 実施状況	19
(3) 各部署の取組状況	20
4. 【2024 年度 特集記事】	
各学部・学群で実施される特色ある演習科目	39
5. FD 委員会について	
(1) 活動概要	55
(2) 活動一覧	56
(3) 委員構成	58
(4) 委員会議事録	58

※Web ページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第1章

はじめに

はじめに

副学長(教育・FD 担当)

FD 委員会委員長 後藤宇生

北九州市立大学では、2025 年度から新しいカリキュラムが始まります。そのカリキュラムにおいて、学生は、最大約 30 単位のメディア授業を受講することが可能となります。新型コロナウイルス感染症対策によって急遽行うことになったメディア授業ですが、感染症が収束した後も、その良い部分を残し、カリキュラムに導入します。

新カリキュラムを踏まえ、さらに今後も ICT を利用して、学生により実りある授業を行うため、今年度は 3 つの FD 研修を行いました。

- 1) 2024 年 9 月 26 日実施 全学 FD 研修『大学教育における生成 AI 利用 実践編』
講師は、森木銀河先生(九州大学インスティテュショナル・リサーチ室 学術推進専門員)です。本研修は、昨年度に実施した AI 入門編の研修内容を踏まえて、ChatGPT 等の生成 AI の大学教育における利用法について研修を行いました。最新の動向、講義資料の作成方法、演習等でのアクティブラーニングにおける活用可能性などについて参加者の理解を促進することを目的としました。
- 2) 2024 年 11 月 5 日～2025 年 1 月 31 日実施 メディア授業 FD 研修
講師は、中尾泰士先生(基盤教育センター)と池之上正人先生(基盤教育センター)にお願いしました。それぞれ担当されている科目(メディア授業「情報社会への招待」「データサイエンス入門」)の授業動画を例に、課題や注意点に関しても簡潔に説明していただきました。この研修では、メディア授業版ピアレビューを試験的に実施し、課題を関係教員で共有することを目的としました。
- 3) 2025 年 2 月 3 日～2 月 21 日実施 全学 FD 研修『8 つの問いから考える学習評価の改善』
講師は、上月翔太先生(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師)にお願いしました。授業の内容・質を向上させ、授業改善を図る重要な手段である「学習評価」について研修を行っていただきました。学習評価の原理から、授業(アクティブラーニング型の授業を含め)の改善までの流れについて報告していただきました。

上記のような FD 活動のほか、授業評価アンケートを行い、学生から授業に対する意見を聞いて、改善に役立てる活動も継続的に行っています。しかしながら、授業評価アンケートは、自由回答欄や教員のリプライに関して、同時に表示できないなど課題が残っています。今後も、より効率的に授業改善が進むように、検討を続けたいと考えています。

また、個だけでなく大学全体から教育を評価するため、教育改革推進室を軸として、教学 IR 室整備やアセスメントプランの策定を行っています。これらの議論を土台として教育の方向性やカリキュラムの改善等の質的向上をめざすサイクルが出来上がっています。より、改善を進めていけるように、FD 活動を一層深めていく必要があると考えています。

最後に、昨年度から引き続き、上月翔太先生(愛媛大学)に FD アドバイザーとして、着任していただきました。春と夏の 2 回の新任教員研修・全学 FD 研修を含め、1 年にわたり熱心な FD 活動へのご協力を賜ってきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

第2章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

- 日 時：2024 年 4 月 4 日（木） 13:00 ～16:00
- 場 所：北方キャンパス 本館 D-503・B-301～306
- 研修テーマ：授業設計の基本ーI コマの授業設計
- 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）
- 研修のプログラム：

時間	内容
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～14:10	授業設計の基本（講義）
14:10～14:20	休憩
14:20～14:50	90 分の授業計画案の発表・グループ内意見交換
14:50～15:00	休憩・教室移動
15:00～15:50	模擬授業とピア・レビュー（演習・各教室）
15:50～16:00	まとめと振り返り

- 参加者数：新任教員 13 名、メンター 11 名、他 3 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「学習目標に適した授業方法を選択できる」、「学生の学習を促す 90 分の授業の計画を作成できる」「作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる」の 3 点と設定された。研修当日は講義科目に焦点をあてた授業設計の基本についての講義があった。主だった内容は、「コース設計（1つの学期における授業の設計）とクラス設計（1回の授業の設計）」、「学習目標の点検」、「導入・展開・まとめ」についてである。その後、90 分間 1 コマの授業計画を新任教員が個人ワークとして作成した上で、新任教員とメンターから構成されるグループ（4 人程度）に分かれ、グループディスカッション、模擬授業、ピア・レビューが行われた。

■ 研修結果とコメント

例年、グループディスカッションの量を増やしてほしいという要望が寄せられていたため、今年度も、基本的な授業に関する講義は 1 時間程度とし、残る 2 時間は授業実践にあたっての個人ワーク、グループディスカッション、模擬授業の時間に充てた。新任教員による活発な議論が行われた。

研修後のアンケート回答数は 24 名（新任教員やメンターなど）であった。アンケートによると、すべて肯定的な評価であり、「大変よかった」が 16 名、「よかった」8 名であった。また自由記述においても多くの肯定的なコメントがみられた。

(2) 夏季新任教員 FD 研修

- 日 時：2024 年 8 月 22 日（木）13:00 ～16:00
- 場 所：北方キャンパス 図書館1階 図書館ホール
- 研修テーマ：学習評価と授業改善の方法
- 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）
- 研修のプログラム：

時間	内容
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～13:50	学習評価の原理（講義）
14:00～14:20	学習評価の振り返り（グループワーク）
14:20～14:30	休憩
14:30～15:10	授業改善の方法（講義）
15:10～15:20	具体的な授業改善の検討（個人ワーク）
15:20～15:50	授業改善の行動案の発表（グループワーク）
15:50～16:00	まとめと振り返り

- 参加者数：新任教員 13 名、メンター8 名、他 3 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

「学習評価の原理を踏まえて評価方法の見直しを図ることができる」こと、「1 学期の授業を振り返り、具体的な改善の指針を得ることができる」こと、を到達目標とした。

新任教員には、事前課題として、1 学期に担当した科目のうち、①担当授業の概要とそこで行った評価の方法、②評価において困ったことや難しいと感じたこと、③担当授業でうまくいったことと課題を感じたこと、④授業を通じて感じた北九州市立大学の学生の特徴について、まとめておくようにとの指示があった。研修当日は、学習評価の原理、授業改善の方法について講義があり、事前課題を踏まえ、メンターを加えたグループごとに、1 学期に実施した授業の学習評価、授業の改善点についてディスカッションや発表が行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度も、参加者の個人ワーク、参加者同士のグループディスカッションを充実させ、研修が進められた。講義の後、すぐに参加者の意見交換に移れるように、移動可能な机と椅子のある教室を準備したが、昨年使用した D-503 教室は工事による支障が懸念されたため、図書館ホールを会場とした。講義と活発なグループディスカッションが実現できたものと思われる。新任教員のなかには、前任校で豊富な教育実践経験を持つ人も少なくないが、メンターの先生や他学部他学科の教員とのグループワークは意義のある経験になったと思われる。

研修後のアンケートでは、概ね、肯定的な評価が得られたと思われるが、欠席者も見受けられ、内容や開催時期・時間について指摘もあった。引き続き、今後の課題としたい。

(3) 第Ⅰ回 全学FD研修

■ 日 時：2024年9月26日（木）14：00～15：00

■ 形 式：Teams ライブイベント方式

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：FD委員会

■ テーマ：「大学教育における生成AI利用 実践編」

■ 講 師：九州大学 インスティテューショナル・リサーチ室 学術推進専門員

森木 銀河 先生

■ プログラム

1	開会のあいさつ	FD委員会 委員長 後藤宇生 先生
2	研修（50分）	森木銀河 先生
3	質疑応答（10分）	2の内容について

■ 参加者数：244名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	31名
経済学部	21名
文学部	31名
法学部	31名
地域戦略研究所	6名
国際教育交流センター	3名
地域共生教育センター	1名
情報総合センター	1名
大学院マネジメント研究科	9名
基盤教育センター（北方）	26名
基盤教育センター（ひびきの）	8名
環境化学工学科	14名
機械システム工学科	13名
情報システム工学科	13名

建築デザイン学科	12 名
環境生命工学科	10 名
環境技術研究所	7 名
その他（学長、特任教員）	7 名

■ 研修の概要

急速に進歩した ChatGPT 等の生成 AI への対応は、本学の教育活動にとって必要なスキルということが出来る。本研修は、昨年度に実施した AI 入門編の研修内容を踏まえて、ChatGPT 等の生成 AI の大学教育における利用法について研修を行った。最新の動向、講義資料の作成、演習等でのアクティブ・ラーニングにおける活用可能性などについて参加者の理解を促進することを目的とした。具体的な研修内容は、大学教育における生成 AI の活用方法と展望について理解するために、1. 主な AI ツールと他大学の事例、2. 大学教育に生成 AI の活用、3. まとめと今後の展望の順番で説明され、生成 AI を教育に活用しようとしている教員が具体的に利用できる具体例を理解できる内容となっている。今回の研修を利用し、授業で生成 AI を有益に利用することが期待される。

なお、本研修は、北方キャンパス、ひびきのキャンパス教員ともに「必修」参加とした。

■ 実施結果

Teams ライブイベントを利用した、学外の講師によるリアルタイム配信は、滞りなく円滑に実施された。本研修の参加者数は 244 名であり、関心の強さが伺えた。研修終了後のアンケートの「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対しては、「非常に参考になった」「参考になった」とする回答が合わせて約 9 割となっており、一定の意義のある研修となったことが推察される。自由記述欄のコメントでは、「AI に関する研修の定期的な開催」を求める意見も見受けられた。生成 AI に関する FD 研修への高い興味が伺える。

(4) 第2回 全学FD研修

- 日 時：2025年2月3日（月）～2025年2月21日（金）
- 形 式：オンデマンド配信（Stream配信による視聴）
- 主 催：FD委員会
- テーマ：「8つの問いから考える学習評価の改善」
- 講 師：愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師
上月 翔太 先生
- 参加者数：245名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	35名
経済学部	25名
文学部	28名
法学部	30名
地域戦略研究所	6名
国際教育交流センター	3名
地域共生教育センター	1名
情報総合センター	1名
大学院マネジメント研究科	9名
基盤教育センター（北方）	27名
基盤教育センター（ひびきの）	8名
環境化学工学科	13名
機械システム工学科	12名
情報システム工学科	11名
建築デザイン学科	13名
環境生命工学科	8名
環境技術研究所	6名
その他（学長、特任教員）	9名

■ 研修の概要

授業の内容・質を向上させ、授業改善を図る重要な手段である「学習評価」について研修を行う。内容として、学習評価の目的と課題、評価に適した到達目標、授業に応じた適切な評価、学習評価の改善案の理解を到達目標とした。これにより、教員が実際の授業内容の改善に利用することが期待される。今回の研修では、特にアクティブラーニングの学習評価についても言及した。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 245 名であった。学習評価については、多くの教員がどのように考えたら良いか専門家の意見を参考にしたいと考えていたようで、本研修に対する関心は十分高かったと思われる。アンケート結果を見ると「非常に参考になった」「参考になった」の割合が9割近くとなっている。特に、アクティブラーニングの評価について参考になったと言及しているコメントが多く見られた。これらにより、本研修には一定の成果があったと考えられる。今回は、事前に作成していただいたスライド資料と研修動画のオンデマンド配信により、研修を実施した。これにより、通信障害などによる中断の心配がなく、滞りなく研修が実現できたことも良かった。

(5) メディア授業 FD 研修

■ 日 時：2024 年 11 月 5 日（火）～2025 年 1 月 31 日（金）

■ 形 式：オンデマンド配信

Moodle で公開：(㊤動画) 今年度の授業動画

Stream で公開：(㊤動画) 「成果と課題、注意点」の動画

■ 主 催：FD 委員会

■ 講師・公開科目

(1) 中尾 泰士 先生（基盤教育センター）：「情報社会への招待」

(2) 池之上 正人 先生（基盤教育センター）：「データサイエンス入門」

■ 参加者数：28 名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	2 名
経済学部	4 名
文学部	1 名
法学部	4 名
地域戦略研究所	2 名
地域共生教育センター	1 名
基盤教育センター（北方）	4 名
基盤教育センター（ひびきの）	1 名
国際環境工学部	7 名
環境技術研究所	2 名

■ 研修の概要

2025 年度に開始される新カリキュラムにおいては、一定数のメディア授業が開講され固定化される。新カリキュラムへの移行をひかえ、メディア授業の効果検証を行うことが全学の方針として求められている。そこで、メディア授業FDとして、メディア授業版ピアレビュー、メディア授業担当教員による効果検証を実施、成果・課題等を担当教員等で共有することを目的とした。ピアレビューでは公開された2科目のMoodle全体と授業の授業動画を研修参加者がレビューする（上記㊤）。効果検証においては、この2科目の講師が感じたメディア授業の成果、課題などの検証が解説された（上記㊤）。

■ 実施結果

本研修の対象者は40名、参加者は28名であった。アンケート結果に見られるように、両科目とも、内容、動画の見やすさ、解説のわかりやすさなど、極めて質の高い授業が展開されていることが確認さ

れた。また、動画を短くして学生の視聴を促していることや、きめ細かく課題を設定してフィードバックを行っていること、不正防止の取り組みなど、さまざまな工夫が高く評価された。他の授業担当者にとっても大きな気づきが得られたと思われる。学生のより積極的な視聴、課題への取り組みを促す方法について課題を感じている教員が多いようである。また、今後、本学がどういった方針で、どの程度、メディア授業を採用していくのかについても意見が分かれているように感じられる。長期的な視点で、全学的な議論を進めていく必要があろう。

第3章

授業のピアレビュー報告

(1)概要

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科等で行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。

(2)実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	4
	中国学科	1
	国際関係学科	1
経済学部	経済学科	8
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	2
	人間関係学科	3
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	2
国際環境工学部	環境化学工学科	3
	機械システム工学科	2
	情報システム工学科	8
	建築デザイン学科	6
	環境生命工学科	4
基盤教育センター	教養教育部門	2
	語学教育部門	
	ひびきの分室	4
社会システム研究科		1
法学研究科		1
マネジメント研究科		7
合計		63

(3)各部局の取組状況

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

各教員が年間に1回程度、お互いの授業を見学し助言するピア・レビューを実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	Hospitality Management	1	35	11			
2	Tourism Policy I	1	60	12			
3	Introduction to Film, Literature, and Theatre	1	129	13			
4	通訳理論と技術	1	55	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・ The lecture on Marketing in the Hospitality Management was interesting and entertaining, and students were engaged in the topic and discussions.
- ・ Some of the students really did a good job on their PPTs which made the content interesting, while some students' PPT were not very good.
- ・ The instruction was informative and students were engaged and interested in the topic.
- ・ 講義と課題を通じて十分に重要事項が身に付く授業の進め方であると感じた。

5. 成果と課題

常勤と非常勤、カルチャー分野とビジネス分野、言語分野とビジネス分野など、異なる講師や授業分野の間でピアレビューができたため、コメントにも有益なものが多かった。
今年度は、日本人講師と外国人講師の間のピア・レビューがなかったので、今後は増やしていきたい。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

中国学科の教員数が少ないため、ピアレビューは年1回（通常は2学期）実施することとなっている。基本的に、①手を挙げた教員が実施授業を決める；②FD委員をはじめ、学科長及び学科教員が参加する；③FD委員が作成した報告書を学科会議で報告する。

今回は学科教員が授業を提供し、学科長・学科教員及びFD委員3人が参加した。ピアレビュー参加者のコメントに基づいたピアレビュー報告書を、後日学科のメール会議を通して、報告が行われ、授業を担当した教員からも説明を行った。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	中国語初級会話Ⅱ	3	17	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・授業の組み立てがきちんとなされており、十分な準備をして授業を行っている。とても良い授業だった。
- ・授業内容が「中国語初級総合」と一部重複するように感じた。「中国語初級会話」という科目の特性を考慮すると、もう少し会話練習や発表に時間を割いても良いのではないかと思います。

5. 成果と課題

- ・1年次の専攻外国語担当教員同士で定期的に情報交換を行う必要性を認識した。
- ・新カリに向けて、学習内容や、授業の組み立て及び教室活動の進行などの面において、貴重な手本と問題を示してくれた。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科
--------	-----	-------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

- ◆専門科目をレビューの対象と定め、原則として年2回にわたりピアレビューを実施すること。
- ◆講義の質向上に重点を置き、ピアレビューに臨むこと。
- ◆今後、非常勤講師に対しても、ピアレビューへの参加を促す。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	「国際関係の争点」	3	113	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ◆学生の興味や関心を引くためのアクチュアルな講義テーマの設定、講義内容を適切かつ効果的に伝える方法、聴講者の集中力を維持する授業構成、視聴覚教材の有効な活用方法、学生参加型・学生主体型のアクティブラーニングの実施など、授業の質向上に向けた多角的な意見や感想が出された。
- ◆学科全教員でレビュー結果を共有することで、授業担当者（被レビュー者）の講義内容や授業方法についての知見を深めるとともに、さらなるフィードバックを行う機会となった。
- ◆学科の全教員がレビューの結果を共有することで、授業担当者（被レビュー者）の講義内容や授業方法に対する知見を把握するとともに、更なるフィードバックを図ることができた。

5. 成果と課題

成果

- ◆専門科目をレビュー対象とし、レビューの定例化を目指したものの、実施頻度は2学期に1回にとどまった。
- ◆ピアレビューの実施を通じて、各教員の講義の質向上への関心が高まったと考えられる。レビューは授業担当者にとってだけでなく、レビューアーにとっても自身の授業実践を振り返る貴重な機会となった。

課題

- ◆ピアレビューの参加率が依然として低い状況が課題である。今後は、より積極的な参加を促進する取り組みが求められる。また、講義全体を参観することで、ピアレビュー活動をさらに有意義なものとするのが期待される。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	経済学部	学科等	経済学科/経営情報学科
--------	-----	------	-----	-------------

2. 部局の実施方針、方法

各教員に対し、各学期1回以上のピアレビューの実施を依頼している。

ピアレビューの機会として、1人の新任教員の担当科目講義とベテラン教員の3科目講義をオープン・ピアレビューとして設定している。各科目については、3回分の公開講義を提供していただいている。そのほか、例年どおりに、入門演習プレゼンテーション大会（第1学期）やポスターセッション大会（第2学期）、合同ゼミなどもピアレビューの対象としている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	入門演習(経済学科)	6	150	11			
2	入門演習(経営情報学科)	4	150	12			
3	財政学	2	20	13			
4	マーケティング・サイエンス	1	20	14			
5	経済学特殊講義	2	40	15			
6	労働経済学特講	4	150	16			
7	証券市場論	2	75	17			
8	ポスターセッション大会	6	300	18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

講義系科目においては、仮想投資の練習、外部講師の招へい、学生との双方向コミュニケーションを取る工夫、アクティブラーニングの学習環境づくりなどについて参考になったとのコメントが多かった。また、学生の興味・関心を引き出す仕組みや学生の集中力を途切れさせないようにする仕組みなどについて参考になった意見も出された。

演習系科目においては、担当教員が学生の目線に合わせたテーマを選び、学生は自身の技量に合わせた気づきを得られている点が参考になったとの意見が出された。他のゼミの報告内容や報告資料の作り方、発表の仕方などから自身の授業改善につながるヒントを得たとのコメントが多かった。

5. 成果と課題

本年度はオープンピアレビューの他にも、オープンキャンパスの模擬授業や合同ゼミなど多岐にわたる形式で実施された。学部全体の授業の質向上に実りのある活動が行えたと考えている。ピアレビュー報告書を提出していただいた先生方は概ね他の先生方の授業から自身の授業改善につながるヒントを得ており、FD活動として授業の品質向上に役立ったと考えられる。

一方で、教員間での実施状況に偏りが見られる。学部全体教育の視点から見て、幅広い世代の教員が積極的に参加することが望ましいと考えている。FD委員として、今後も多くのピアレビューの機会を提供し、より多くの先生方が参加する環境づくりに引き続き努めたいと考えている。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

新任教員の授業を中心に実施している。特別講義等で外部講師を招聘した場合も、FDを兼ねてピアレビュー対象授業としている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	比較文化入門Ⅰ	3	164	11			
2	比較文化入門Ⅱ	4	164	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

新任教員に対しては、教材の工夫や学生への発問など授業の技術に関連してコメントが出されることが多く、授業の工夫や教育的効果についてフィードバックするものが多かった。また、比較文化入門Ⅰ・Ⅱの授業に関しては、新任教員に科目のコンセプトが正しく伝わっているか、授業のテーマ設定は適切かなどについてもコメントが出された。

5. 成果と課題

新任教員に対するピアレビューは、新任教員が学科の教育方針や授業のコンセプトを理解できているか確認し、フィードバックする貴重な機会として機能している。また、新たに仲間となった教員への励ましの場ともなっているようである。
今後の課題としては参加者数の増加、ある程度学科の環境に慣れてきた教員の授業改善などが挙げられる。それに伴いレビューの対象とする科目の拡大なども考えられよう。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

教員の負担にならない範囲でピアレビューの実施するために、1学期はオープンキャンパスでの模擬授業をピアレビューの対象とした。また、2学期については、アクティブラーニングを取り入れられている先生の授業でピアレビューを実施した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	オープンキャンパス模擬授業	5	90	11			
2	オープンキャンパス模擬授業	4	90	12			
3	参加型学習論	5	50	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

受講生の興味をひくための様々な工夫がこらされていて、大変 クオリティーの高い授業だと感じました。受講生にとって、自分自身を対象として実験を行うという事は、心理学についての基礎的な理解をする事を深めるだけでなく、講義形式の授業における能動的な参加を促進する上で、非常に意義があると思いました。

CMやニュースの特集部分等、動画をうまく組み合わせつつ要所で問いを発して受講者が考える場面を組み込む等、メリハリをつけた授業になっていて良かったと思います。

本格的なアクティブラーニングの授業を初めて拝見しましたのでとても興味深く、私も多くの学びがありました。

5. 成果と課題

今年度は、1学期に2回、2学期に1回ピアレビューを実施し、多くの先生方に参加・協力をいただきました。成果としては、ピアレビューを実施することで、双方に良い刺激を与えることができたのではないかと考える。来年度以降の課題としては、1つの授業で複数回ピアレビューを実施することで、学習による学生の変化をみるような定点観測的なやり方も検討できればと考えている。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	法律学科
--------	-----	-----	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

法学部では、法律学科と政策科学科から一名以上ずつ各学期に予め指定した教員の担当科目（合計4科目、教員4名）について他の教員による授業参観（ピアレビュー）を実施した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	民法入門	1	210	11			
2	刑事司法政策Ⅱ	1	88	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・抽象的な専門用語については、身近な例を用いて説明されており、親しみやすく感じられた。
- ・法律関係が図示されており、分かりやすい。
- ・改正法に適切に対応するとともに、改正前の条文についても触れられており、旧法下の判例学習などに役立っている。
- ・冒頭では講義内容に関連するニュースが取り上げられており、学生の関心を引くような工夫がなされている。
- ・レジュメは最新のデータに基づいて詳細に作られている。
- ・小テスト(10分程度の簡単な穴埋め問題)を実施して知識の定着を図っている。
- ・大講義室での授業であるにもかかわらず、教員からの問いに対して学生が積極的に手を挙げて答えている姿勢が印象的であった。

5. 成果と課題

法律学の分野では、抽象的内容について理解しなければならない部分が多く、そのために学習スタート段階で挫折する学生も多い。上記ピアレビュー実施授業はいずれも具体的な場面やケースを通じてさまざまな制度や概念等について分かりやすく解説されており、大変参考になる。今後はICTの活用が課題として残される。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	政策科学科
--------	-----	-----	-----	-------

2. 部局の実施方針、方法

法学部政策科学科では、2024年度に1学期2学期それぞれ1科目について、ピアレビューを実施した。ピアレビューに関しては、FD委員もしくは政策科学科の教員1名以上が、政策科学科で提供する講義科目（演習科目は除く）を受講し、担当教員の講義の進め方、講義内容に関してのレビューを実施する形式である。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	途上国開発論	2	127	11			
2	政治過程論	1	37	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・ゲスト講師を迎えて行われた講義だったことから、それまでの講義の内容を踏まえ、当事者の経験を聞くことで、理論と実践を結びつける内容であるなど、工夫がなされていた。
- ・国際協力という関心の高い内容で、かつ当事者の声を聞くことができ、受講生の印象にも残りやすく、ある種のキャリア教育の要素もある講義形式だった。
- ・担当教員とゲスト講師が密に連携を取り、それまでの講義内容をキャッチアップできる形式で、ゲスト講師を呼ぶ際の参考になる講義だった。
- ・テーマに対する問題提起を行い、その論点整理と、その論点を扱う学説や理論を提示するという形で、講義が行われ、問題解決式のような工夫が見られた。

5. 成果と課題

政策科学科では、講義科目とその後の演習科目があり、理論と実践をつなげることを目指している。そのため、講義科目では、理論的な説明とともに、学生の問題関心を広げることや、実践との関連性を意識させることが重要となっている。その上で、今年度のピアレビューを行った講義では、問題関心を広げるものや実践との関連性を、改めて意識できる重要な機会であった。

課題としては、こうしたピアレビューで得られた成果や認識をどのように学科内で共有するかと、今後の授業形式の変化を踏まえ、生成AIやデジタル化などの多様な工夫を講義にどのように組み込むかを検討し、学科全体として、推進していくことが挙げられる。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類
--------	-----	--------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

地域創生学群に設置されている「地域創生科目」「地域創生スキル科目」「地域創生活動科目」において各専任教員が相互にその内容、方法、スキルを学ぶことにより、質の高い教育を提供できるようにするため、これらの科目を中心にピアレビューの実施を働きかける。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	指導的実習Ⅰ	13	122	11			
2	地域創生の基礎Ⅰ	9	122	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・指導的実習の一環として取り組まれている「地域FM実習」が本年度形式を刷新したこともあり、本授業に参加することで内容や教育方法だけでなく、これまでの実習との取り組みの変更点や学生の反応なども総合的に理解することができた。また、成果発表会として行われた「地域FMラジオ実習の大発表会」は多くの地域の関係者の方も参加していただき、地域創生学群の教育や学生の様子を地域の方にも理解していただく良い機会となった。

5. 成果と課題

地域創生学群の教育において、実習教育は根幹的学びであり、また初年次教育と専門教育の接続は大変重要なものと考えられる。そのため、主に初年次教育をご担当いただいている特任教員と専任教員が情報の共有を図ることが必要不可欠だが、その情報を専任教員が知る機会はまだ多くなかった。地域創生実習指導や地域創生実習など初年時の教育を実施している科目へのピアレビューを進めることや、専任・特任教員間の情報交換の交流の場を設けることにより、相互理解が深まり、学生の具体的な様子や学修状況を踏まえて、学生の指導に活かすことができる機会となった。今回の実施にとどまらず、次年度以降も継続的にこのような場を設けていきたいと考えている。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境化学工学科
--------	-----	---------	-----	---------

2. 部局の実施方針、方法

新任教員の授業内容の向上を図る内容とする。そのため、新任教員の授業を公開するとともに、新任教員にその参考となるベテラン教員1名の参観が可能なものとする。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	有機化学Ⅱ	6	50	11			
2	分析化学	10	50	12			
3	無機化学Ⅱ	10	70	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

最重点項目についてごく少数の改善点指摘を除けば、非常に高い評価を得られていた。
最重点項目についてほとんどの聴講者が非常に高い評価を行っていた。
1名だけ単なる高い評価を付けるだけではなく、資料、授業中の問題、試験の方法についての疑問をもつ意見が見られた。

5. 成果と課題

新任を含む若い教員にとって有意義なPRとなった。今後もこの内容を基に授業充実に取り組んでいってほしい。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

今年度はカリキュラム改編を行った。その中で、実習・実験系科目内で行われている細かいテーマの見直しが必要か否かの検討材料にするため、一つの講義の中で複数のテーマのある実習・実験系科目のピアレビューを第1学期・第2学期とも実施する方針である。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	加工法実習	8	47	11			
2	機械工学実験Ⅱ	6	41	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・他の講義科目との関連性を説明しつつ実験が進められていた点がよかった。実験の目的や関連知識の理解を深める工夫がされていた。
- ・非常にわかりやすい説明を行っていた。丁寧すぎるくらいに説明を行っていた。
- ・スライドや動画を用いた分かりやすい説明がされており、実験の目的や関連知識の理解を深める工夫がされていた。
- ・実習のテーマによっては、旧式の実験機器を用いて実習を行っていたため、テーマの変更もしくは機器の更新を検討した方が良いという意見や、加工センター内は各種機械の騒音により、少しでも講師から離れると説明が聞こえにくくなるため、マイクやイヤホンを使用すべきなどの意見がなされた。

5. 成果と課題

基本的に公開された講義全てにおいて評価が高かった。そのためピアレビューに参加した教員は何かしら自分の講義において参考になることがあったと思われる。また、学科の大多数の教員が所属する科目でどのような実習・実験が行なわれているか再確認できるいいチャンスとなった。今後、実習・実験系科目内で行われている細かいテーマの見直しが必要か否かの良い検討材料になると思われる。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

前年度に未公開の科目の中から、新任教員の担当科目、高い評価と低い評価の科目を公開し、ピアレビューを実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	通信工学	3	83	11			
2	システム制御 I	2	80	12			
3	ネットワークとセキュリティ	4	57	13			
4	コンピュータシステム	3	73	14			
5	電気回路	4	81	15			
6	感覚と知覚の科学	1	75	16			
7	理工学基礎演習	2	13	17			
8	システムモデリング	3	76	18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・授業内容のパワーポイント資料が整理されていてわかりやすかった。
- ・講義で扱う内容に関する応用事例や例題などについて紹介することで、学んでいる知識や技術の必要性を示し、講義に対する関心を持たせる工夫が行われた。
- ・講義中に時間を設けて適宜に演習問題を取り入れ、学生の理解を深めた。
- ・多くの科目では学生の理解度を確認する小テストを実施した。
- ・一部の科目では、黒板とスライドを併用し、問題の解答を導く考え方とプロセスを丁寧に示した。
- ・例題や演習の量について、適宜に調整しても良いというコメントがあった。

5. 成果と課題

すべてのピアレビューの公開科目において、講義資料や内容説明の分かりやすさ、応用例の導入、演習や小テストの実施をしており、効果的であった。また、授業と関連する話題を学生が興味を持ちそうな形で紹介したり、口頭説明と図、表などの視覚的な資料を合わせたりすることで理解を促す工夫を行っていた。

課題として、授業の電子化が進む中で、効果のある授業スタイルを考える必要があり、専門分野の特徴と学生に適する効果的な授業スタイル、学生の基礎知識のレベルと講義内容に対する理解度に応じた難易度、内容のボリュームの調整が挙げられ、今後検討すべきである。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科
--------	-----	---------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

本学科のピアレビュー方針は、
「新任教員の担当する授業や可能な限り授業評価アンケートの高い授業のピアレビューを中心に行う。」である。なお、概ね以下の方法でピアレビューを実施した。
1) 授業公開する教員は、授業公開を告知するとともに、重点項目設定シートに基づいて重点項目およびその具体的な取り組み内容を決める。2) 授業を参観する教員は、公開教員が作成した重点項目設定シートに基づいて、公開された授業に対する評価を行う。3) 公開教員は参観教員の評価に基づいて実施報告書を作成する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	見学WS演習 I	1	56	11			
2	環境設備基礎	1	60	12			
3	環境工学実験	1	52	13			
4	設計製図III	2	54	14			
5	保全構造実験	1	48	15			
6	建築材料実験	3	56	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

出された主な意見は、以下に示すように（一例）、肯定的な意見が多く見られた。
・これまでの講義の実施風景の写真をスライドで見せ、手順を説明することで、受講者が容易に理解できるよう、工夫がなされていた。
・ホワイトボードを有効に使い、あらかじめ作業分担を決めることで、全員が必ず試験体に触れることができ、積極的に参加していた。
・オンラインツールを駆使し、更に早めに済んだ学生に対しても対応を行っており、学生の習熟度に沿った効果的な講義進行が行われている。
・学生の理解度に応じて、話すスピードを変えたり、適度な間を設けることによって、学生の集中力、理解度が高まるように適切に配慮していた。 など

5. 成果と課題

今年度のピアレビュー参加率（92.9%）は、昨年度（2023年度，85.8%）に比べて、若干改善した。今年度は新任教員が担当、参観した授業数が増え、全体として公開した授業数も昨年度の4科目から6科目に増えたことが理由として考えられる。今後は、高いピアレビュー参加率を維持できるように、各学期において複数回の周知を行うように配慮する。
一方、他の科目と連携させて、学生の理解を深めるための工夫がされているなど、多くの科目において様々な工夫が行われていた。次年度以降、前述のような「高い参加率」や「高評価コメント」を維持していくことが課題として考えられる。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科
--------	-----	---------	-----	---------

2. 部局の実施方針、方法

【方針】新任教員の講義を中心にピアレビューを実施した。

【方法】新任教員2名が担当する座学講義について、数名の教員でピアレビューを実施した。特にピアレビュー教員は、学科長、FD委員、若手の准教授をFD委員が指名する形をとり、他分野の講義状況を研修する機会を設けた。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	一般物理学・演習	4	46	11			
2	物理化学	4	32	12			
3	基礎有機化学（生命）	3	46	13			
4	生命有機化学	3	32	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

【座学科目】

どの講義も大変見やすいスライドであった。演習を入れるタイミングも大変効果的であり、また演習中は学生の取り組み状況を見回りながら丁寧な対応がなされており、多くの学生が講義に前向きに取り組んでいた。

5. 成果と課題

・新任教員の担当科目については、学生の教育効果が最大限に引き出せるように、授業の構成、進め方、学生の理解度への配慮など、様々な観点からの工夫が見られた。これは参観した教員にとって良い研修の機会となった。課題点は特に見当たらなかった。

・本学科では来年度も数名の新任教員が赴任することから、引き続き新任教員の講義を公開しFDを行うことで、教育の質の向上と既存の教員への啓蒙を行っていく。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター	学科等	
--------	-----	----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針：基盤教育センターでは、部門内の教員間で年1回のピアレビューを推奨している。
 実施方法：①複数の教員が特定の教員（FD委員から依頼）の講義・演習を見学し、当該授業の内容について話し合い、FD委員がピアレビュー報告書を作成する。②各教員が個別に任意の講義・演習を見学してピアレビュー報告書を作成し、FD委員に提出する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	現代社会と文化	3	不明	11			
2	環境特講A（SDGsの可能性）	1	50	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・現代社会と文化：配布資料、スライド、授業の進め方など様々な工夫が施されていた。また、フィードバックの時間を取り入れて講義の双方向性を高め、前回内容の振り返りを導入に位置付けることで、理解増進が企図されていた。さらに、授業目的や授業のポイントの確認にあたり演習形式を取り入れ、学生の能動的な授業参加が促されていた。
 ・環境特講：「医学モデル」「社会モデル」「文化モデル」という障がい認識モデルの概要および各モデルの改善点が紹介され、担当教員が考える3つのモデルを活用した理想的な関係性に話題が及んだが、自身の経験を交えながら聴きやすい速さで話されており、理解しやすい講義であった。

5. 成果と課題

ピアレビューの実施により、他教員の講義における様々な工夫が明らかになり、参加教員からは、授業内の工夫（講義内での演習実施など）を評価する声が多く聞かれた。ピアレビューを通して得た授業改善に向けた知見は、各々が講義の中で活かしていくことができるものである。その一方、そうした「分かりやすく、丁寧で、学習効果に重きを置いた講義」のためのテクニックと、学生が自ら考える機会をいかに両立させていくかという問題も浮上した。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター ひびきの分室	学科等	
--------	-----	--------------------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針

積極的にピアレビューを行い、授業活性化の工夫、授業外学習の実施方法などを確認し、それぞれの授業改善のきっかけを得る。

実施方法

授業公開日をひびきの分室教員で共有し、教員が任意に連絡を取りながらピアレビューを行っている。相互に情報提供と意見交換を行うことで、教育力向上に努める。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	総合日本語A	1	9	11			
2	日本事情	1	10	12			
3	経済入門Ⅱ	1	46	13			
4	英語Ⅳ	1	25	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・大学生に求められる情報発信能力を意識した授業実践が展開されていた。
- ・グループワーク活性化のための工夫が他の授業でどのように行われているのかを実際に授業見学をすることで具体的に参考にできた。
- ・ピアレビュー参観者が教室にすることで、教員のみが評価をするだけでなく、実際に言葉をつかって説明させ理解させなければならない場面が創出できるので、学習者にとっても良い刺激になったと感じました。

5. 成果と課題

次年度以降も教員相互でピアレビューを行い、他教員の指導方法を参考にして教育力の向上に努める。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	社会システム研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

(1) 方針：「社会システム総合概論」をピアレビュー科目として設定する。
 本科目は、「東アジア」「文化言語」「地域コミュニティ」「現代経済」専攻の教員（各1名）によるアクティブラーニング形式の授業である。科目の目的は、専門領域にのみ関心が向きがちな大学院生に各専攻の枠を超えた複合領域的な視点と発想を持たせることにある。その実践を改善するとともに、同様の視点を指導教員も確認する。

(2) 方法：院生が本科目の実施形式に慣れた段階（1学期後半）で各専攻からの教員によって実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会システム総合概論	5	13	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・ゼミでの発表とは異なり他専攻の院生と意見交換する機会はありませんため知的な刺激を得られないのではないかと考えます。
- ・4人の報告者の発表に対して専攻が異なる学生も積極的に質問やコメントをするなど、研究報告会に相応しい雰囲気だった。
- ・研究のきっかけ、意義、方法などの共通項目に沿って、各自の研究テーマを発表することによって、学生自身が研究の方法論について整理することができただけでなく、学習者間の相互的学習も可能となりました。
- ・担当教員による司会も的確に行われており、報告者への配慮が感じられるものだった。
- ・学生のプレゼンテーションはよくまとまっている。

5. 成果と課題

(1) 成果：昨年度からピアレビューの回数を増やし、発表学生のスケジュールを事前に教員に知らせることで参加者数、ピアレビュー数が増え、FDとしての効果も期待できる成果が得られた。

(2) 課題：「質疑応答の形式についても学ぶ機会とするように」とのアドバイスが担当教員からあったが、発言者が数人の学生に限られており、発表への質問を遠慮している様子が見受けられた、という意見があった。学生同士の議論の活発化は課題である。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学研究科	学科等	
--------	-----	-------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

大学院法学研究科では、2017（平成29）年度以降ピアレビューを実施している。在籍している大学院生の人数が少なく、またピアレビューに不向きな修士論文等の執筆を直接的に指導する科目も多い。その上で、講義科目を受講する修士1年の学生は、2024年度は1名のみであったため、1学期2学期の計2科目においてピアレビューを実施することは困難である。このような現状を踏まえ、2024年度は、法学研究科では、1学期1科目でピアレビューを実施した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	法律文献調査	2	1	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・履修生に法律分野での論文執筆を説明した後に、論文作成に必要な要素としての引用や剽窃の禁止などが説明されるとともに、科目の全体像や共通項目・前提についてを教示し、講義の流れの把握ができるものであった。
- ・研究活動の基本について、2年間の研究活動に資する基本的な研究姿勢や留意点について、具体例をあげつつ、端的かつ的確に教示がなされ、今後の研究活動につながる基礎力が身につくような工夫がなされていた。
- ・法律分野に即した先行研究の話であり、概念的な説明が多かったが、具体例などをわかりやすい表現を用いており、より抽象的な内容に対し、具体的なイメージが付きやすいものであった。

5. 成果と課題

法学研究科では、少人数の授業で専門的な知見を提供し、このことは、教員と受講生が対話を重ねることが可能となっており、受講生の興味・関心に即した授業を展開し、受講生の理解の向上に大きく貢献している。

一方で、ピアレビューの実施という観点では、少人数の授業にピアレビュー参加教員が受講生を超えて、参加するのは、心理的負担の面からも受講に支障がきたす可能性がある。また修士1年の2学期以降は、論文指導が中心となっており、ピアレビューに適さない科目が多くなる。これらの点について、今後、法学研究科としてのピアレビュー実施のあり方や、別の方法でのFD活動の実施などの検討を行う必要がある。

2024年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	マネジメント研究科	学科等	マネジメント専攻
--------	-----	-----------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

- ・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
- ・今年度のピアレビューは、FD委員2人が新任教員の担当講義を対象に実施した。
- ・ピアレビューの結果は研究科内で共有され、教育内容・方法の改善を図ることとしている。
- ・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	マネジメント特殊講義B	2	5	11			
2	地域政策	1	12	12			
3	マーケティング戦略	2	6	13			
4	マネジメント特殊講義A	2	8	14			
5	アントレプレナーシップ	2	7	15			
6	リーダーシップと倫理	2	6	16			
7	地域づくり戦略	1	4	17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・冒頭で前回講義の内容の振り返りが行われた。
- ・配布資料がとても丁寧に作られており、図表や具体例も多く、受講生にとっても非常に分かりやすい講義であった。
- ・実例を示し、良い点悪い点を学生に考えさせて、理論と実践の両面から考察していた。問いかけが多く、受講生自らが考え発言する機会が多かった。
- ・学際的な理論と身近な商品・サービス例を随所に活用されていた。
- ・卒業生のケーススタディを兼ねたゲスト講義が行われ、学生にとってはより身近かつ質問もしやすい内容であった。
- ・フィールドワークで実際に企業に出向き、講義で得た知識やノウハウに基づいた気づきや提案をまとめ、学生全員による発表がされていた。

5. 成果と課題

- ・複数の授業で実施されていた、前回の講義の振り返りは、前回の復習と今回への橋渡しを兼ねて非常に有効であった。
- ・どの講義でも、教員と受講生との適度な双方向性が見られ、受講生の参加意識も高かった。
- ・シラバスを参照しても、今回がどの回に該当するかわからない講義もあった。全体の講義の中の立ち位置の確認として、冒頭にシラバスを確認するステップを設けると良い。
- ・講義内でグループワークや個人ワークが行われる事も多かったが、実施に際して具体的な手順の説明がなかったために学生のアウトプットが様式も深度もバラバラであるケースも散見された。

第4章

2024 年度 特集記事

特集記事

「各学部・学群で実施される特色ある演習科目」



取材・編集 2024年度 FD委員会FD活動広報ワーキンググループ

胡玉華（外）、姚智華・市原勇一（経）、渡瀬淳子（文）、齋藤 友美子（法）、寺田千栄子（地創）、池田隆介（基盤ひびきの）



【多文化共生に向けての実践演習】

大平 剛 教授(外国語学部国際関係学科)

担当「特定課題演習 B(異文化理解)」履修者:1 年生 8 名、2 年生 4 名、3 年生 2 名

記載日:2024 年 12 月 16 日(月)

F D 委員:胡 玉華

この授業の紹介をお願いします。

この授業は異文化理解を目的に開講しており、とりわけ外国語学部の 3 学科に開かれている演習形式の授業である点が特徴です。英米学科、中国学科、国際関係学科の希望者なら誰でも受講することができ、学科を越えた学びと繋がりができます。この授業では、外国語学部と国際協力機構(JICA)九州との間で締結された協定に基づき、JICA 九州で学ぶために世界中から来日される研修員の方々との交流会が組まれています。そのため、それら研修員の方々の母国について学習したうえで交流会に臨みます。おのずと主な使用言語は英語になります。受講者は英語でのプレゼンテーションを重ねて、様々な国の文化や社会について知り、異文化への理解を深めます。また、JICA 海外協力隊経験者を招き、赴任国での経験などについて聞く機会も設けています。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

様々な国の文化や社会について調べて視野を広げることと、臆せず人前で英語で話ができるようになることの両方を重視しています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

日本で生活していて「当たり前」と思っていることや「常識」だと思っていることを、改めて問い直してみる必要性を感じてもらい、日本社会や自身が持っている価値観を相対化して欲しいと思っています。そのうえで、様々なバックグラウンドを持つ人と共生していくために必要な知識や感性を持ってもらいたいと思っています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

英語でのプレゼンテーションを行ってもらいますが、学年や所属学科が異なると英語力に差があるのは仕方ありません。そこで、初めのうちはグループでプレゼンテーションを行い、個人負担を軽減しています。2 回目のプレゼンでは「推し活」と称して、自分の行きたい国や場所を個々にプレゼンしてもらっています。身近な話題で場の雰囲気を和らげるとともに、多少文法的な間違いがあってもコミュニケーションが取れさえすれば大丈夫だ、ということを実感してもらえそうな授業展開を心掛けています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

3 学科の学生が入り混じっていることから、初めのうちはぎくしゃくした雰囲気になりがちです。グループワークも学科と学年が一緒の方が準備しやすいということもあって、授業の前半はなるべく同じ学科の者同士でグループを作るようにしています。後半になって場が和みだしたら、学科と学年を超えたグループを形成し、授業内でグループワークを行ってもらって発表の準備をしてもらうようにしています。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

研修員の方々との交流会を経て、「もっと世界について視野を広げたい」「英語力をもっと伸ばしたい」という感想を述べる人がほとんどです。外国語学部が目指す「グローバルな視野を持って行動できる人物」になることを、この授業での体験を通して実感してくれているように感じます。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

英語を活かした異文化理解を目的とした演習科目ですが、外国語学部のほかの科目にも応用できる点が多いです。例えば、①教員からの一方的な説明ではなく、学生自身によるプレゼンテーションも取り入れ、プレゼンテーションの機会を増やすことで、様々な国の文化や社会について知り、異文化への理解をさらに深めることができる点。②「正解」を教えるのではなく、自文化と異文化の比較や見直し、再認識を通して、学生の「考える力」を鍛えている点。③学習の場は教室にとどまらず、社会(世界中から来日した研修員や JICA 海外協力隊経験者との交流会)へ広げている点。④学生間の相互学習を重視し、積極的にグループ活動を取り入れるとともに、学生の英語能力や専攻の違いによるギャップを無くすために、授業の各段階でのグループ編成が工夫されている点。以上のような、アクティブラーニングの実施における工夫は特に見習いたいです。



【学生主体の運営と深い学びが共存するゼミ活動の実践】

村原英樹 准教授(経済学部 経営情報学科)

担当「専門演習Ⅰ」履修者:3年生11名

記載日:2024年12月11日(水)

FD委員:姚智華

この授業の紹介をお願いします。

この授業では、各自1冊の書籍を選び、その内容を完全に理解し、その中で興味を持った内容について卒業論文を書くための準備をすることで、深い学びに繋げていくことを目的としています。ゼミ活動の序盤(3年生の1学期～12月頃まで)では、ゼミ生のメンバーが交代で、20分～30分程度、各々がその書籍の内容について発表し、その後は卒業論文作成に向けた準備を行います。ゼミ活動の序盤の発表などにより、発表者自身の理解が深まるとともに、他の学生も幅広い知識を得る機会が得られることを目指しています。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

このゼミでは、単なる知識の習得だけでなく、自分自身の力で考え、他者に説明する能力を養うことを大切にしています。何かを深く本格的に理解するという姿勢を重視し、最終的には、各自が選んだテーマについて主体的に研究を進め、卒業論文という形で成果を残せるようにすることを目指しています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

しっかりとした学識を持つことで、素人にはできない、レベルの高い卒業研究をすることができるようになって欲しいと考えています。また、自分で選んだ書籍を読み解き、その内容を他者に伝えるスキルや、自分の意見を論理的に整理し表現する能力を養うことも重視しています。さらに、他分野にも触れることで幅広い視点を持つことにも期待しています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

他の人の発表を聞くことで、自分が勉強していること以外のことにも、ある程度の素養を持てるように工夫しています。また、発表内容に対して積極的に質問や議論を行う場を設けることで、ゼミ生同士の学習の相乗効果が得られるよう工夫しています。さらに、自分が取り組んでいるテーマが具体的な形で卒業論文として取り組む予定であるため、モチベーションが高まりやすい環境を整えられるように努力しています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

ゼミ活動では、学生が選んだ書籍の内容が難しすぎたり、逆に簡単すぎたりする場合があります。この問題を克服するために、書籍選びの段階で教員がアドバイスをを行い、学生のレベルや興味に合った書籍を選ぶようにしています。また、発表では、他の学生や教員からの質問を通じて新たな視点を得られるよう配慮しています。さらに、進捗に応じた個別指導も行うことで、理解の遅れを防ぐように配慮しています。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

ゼミ活動を通じて、学生は論理的に考える力や、自分の意見を明確に表現する力を伸ばしています。卒業論文執筆に至る頃には、自分の研究テーマに対して強い主体性を持ち、より深い探究心と専門的な知識を備えるようになります。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

参加ゼミの観察と所感

本日見学した村原先生のゼミでは、教育的配慮と学生の主体性を最大限に引き出す仕組みが巧みに取り入れられており、大変印象的でした。以下に、具体的な観察事項と所感を報告いたします。

1. 学生主体のゼミ運営

ゼミ長の選出を自薦方式とし、ゼミ長がゼミ全体の司会進行を担当する運営方法は、学生に責任感とリーダーシップを育む素晴らしい仕組みです。ゼミ長は、始まりの挨拶から発表者の順番決め、質疑応答での質問者の指名、そして終わりの挨拶まで、学会の座長に相当する役割を果たしており、その結果、ゼミ全体がスムーズかつ秩序立った進行を見せていました。特筆すべきは、全員が最低一度は発言する機会を確保する工夫がなされていた点であり、これによって学生全員が積極的にゼミに参加していました。

2. 発表内容と先生の事前準備

ゼミでは、学生が各自で選んだ本を精読し、それをもとに 20 分間の発表と 10 分間の質疑応答を行っていました。本の種類は理論的なものから応用的なもの、さらには学術論文まで幅広く、学生の個性や興味が存分に反映されていました。さらに、指導教員である村原先生が、全学生が選んだ本を事前に入手し精読している点に感銘を受けました。これにより、先生は質疑応答の場で適切かつ深い洞察を提供し、学生たちの理解をさらに深める環境を作り上げていました。

3. 発表の質の高さと相互交流

学生たちの発表は単なるスライドの棒読みではなく、内容に対する独自の解釈や具体的な例えを使った説明が特徴的でした。一部の学生は数式を板書しながら説明し、プロジェクターと黒板を併用するなど、多様な方法で聴衆を引き込みました。質疑応答では、数列の応用例に関する高度な質問や、プレゼンの改善点に関する建設的なコメントが飛び交い、非常に活発かつ有意義な議論が展開されていました。このような質の高い交流は、学生同士の学びを深める重要な機会となっていたと感じます。

4. 卒業論文に向けた準備の徹底

村原ゼミでは、発表した本や論文から興味を持ったトピックをもとに、学生が 1 万字の卒業論文に取り組むプロセスが組み込まれていました。指導方針として、広く浅く調査するのではなく、一点集中で深く掘り下げることを目標としており、学生にはそのトピックについて何も見ずに 30 分から 1 時間話せるレベルの深い理解が求められています。このようなアプローチは、就職活動で研究内容を問われた際に自信を持って答える能力を養うことにもつながる素晴らしい取り組みです。

5. 卒論執筆プロセスの工夫

次週のゼミから本格的に卒業論文執筆が始まると聞きました。まず目次を発表して全員で共有し、論文の骨格を固めてから執筆を進めるプロセスは、執筆の方向性を明確にし、効率よく論文を完成させるための有効な方法です。この段階的なアプローチが学生にとって負担を軽減し、着実な進捗を促すと感じられました。

まとめ

本日紹介した村原ゼミでは、学生の自主性を尊重しながらも、指導教員の綿密なサポートが随所に見られ、教育的効果が非常に高いと感じました。特に、ゼミの運営方法や学生の主体性を引き出す工夫、発表や議論の質の高さは、私自身の教育活動にもぜひ取り入れたい要素が多く、非常に参考になりました。今回の参加を通じて得た学びを、今後の活動に活かしていきたいと思えます。

【学生たちの多様な関心に応える授業①】

山口裕子 教授(文学部比較文化学科)

担当「演習 A-1,A-2」履修者:3 年生 9 名

記載日:2025 年 1 月 22 日(水)

F D 委員:渡瀬享子

この授業の紹介をお願いします。

3 年生向けの演習(ゼミ)です。東南アジア地域を主な対象に、多民族・多文化・多宗教社会の諸相や、日本との歴史・文化・社会的関係性について学びます。学外活動としては、福岡のマスジド(モスク)の見学とハラール(イスラーム法上許された)もつ鍋の実食をほぼ毎年しています。事前に、文献を用いて日本とイスラームに関する座学もします。また、年に数回、4 年生とゼミを合同開催して、卒論の中間発表や構想発表で学年を超えてコメントする機会も大事にしています。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

それまで学んだり、あるいは当たり前だと思ってきたことを、東南アジアという視点から見直すことで得られる小さな発見を積み重ねることを重視しています。そのために、学生の関心事も取り上げますが、敢えて関心の薄いテーマにも取り組むことで視野を広げ、その中に重要性や面白さを見つけられるように気を付けています。また、学生同士の学びあいも重視しています。4 年次の卒論研究では、教員はもちろん指導をしますが、学生相互に草稿に対してコメンテーターを務め、アドヴァイスしながら執筆を進めます。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

意外と知らない東南アジアの歴史や文化、日本との関係性について学んで欲しいというのはもちろんですが、ある社会や文化を理解する営為には唯一の正解はなかなかありません。ゼミでの学習が、そのような定まった解のない対象に粘り強くアプローチする力や、それを楽しめる力を身につけるきっかけになればと思っています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

普段のゼミ活動は、テーマを決めて資料を読み、ディスカッションをするという極めて地味でスタンダードな内容ですが、できるだけ脳内がアクティブになるよう、実社会で起きている/起きたこととゼミの学習とをリンクさせるように気を付けています。また、学生同士が相互に関心を持ち、コメントし合うようにたくさん発表させます。見てみる、やってみる、食べてみることもゼミ内でできるだけ実践しています。例えばインドネシア語訳された日本のコミックを日本語訳してみる。東南アジアの短編小説を日本語で読んでみる。東南アジアの LGBT の映画をネットで見てみる、バリ島のケチャ・ダンスをやってみる、タイの香り米を食べてみる、などです。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

相互の意見を尊重し、話題をふれば短時間でよくまとまったコメントをすることができる学生が多いです。が、反対意見を戦わせて、より深い理解へと昇華させる、と言った境地にはなかなか至りません。また、知的好奇心が旺盛で、その場の理解力は比較的に優れていますが、学修したことの定着についてはまだまだ改善の余地がありそうです。毎回 1 つだけでも「これだけは覚えて帰ってキーワード」を自分の中に刻むよう言ったり、折々に振り返りをしたりするようにはしていますが。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

もともとまじめで学習意欲の高い学生が多いですが、中には、ICT を使って効率よく学習や課題を終わらせようとする学生もいました。が、後者のような学生も他の学生の取り組みをみて、学習に相応に手間暇かけるようになってきたのが良い変化です。相互に建設的なコメントがしあえるような信頼関係は築けているように思います。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

社会学系のゼミは、日常的な話題から入っていける間口の広さが魅力ですが、その分集まる学生たちの興味関心の幅が広く、画一的な指導が難しい側面があると思います。広域にわたる外国の文化を扱うとなると、言語の壁もあって、学術的な深みに触れてもらうのも一苦勞でしょう。基礎的な学習は欠かせないけれど、それは難解で地道な努力を要求されます。思っていたのと違うと感じる学生もいるかもしれません。そこで実践的学習、特に当地の食文化やサブカルチャーなど、学生が興味関心を抱きやすいものに適宜触れさせながら、専門的な学習へ繋げていくところはさすがだなと感じました。

また、学生たちにとって体験学習は楽しいものですが、それが日頃の学習や自身のテーマと結びつかなければ楽しむだけで終わってしまうことも多いと思います。上手く機能すれば学習意欲を増し、座学で学んだことを活かす場にもなるので、積極的に取り入れたいと思いました。

【学生たちの多様な関心に応える授業②】

真鍋昌賢教授(文学部比較文化学科)

担当「演習 A-1」「演習 A-2」「演習 B-1」「演習 B-2」履修者:3年生 9 名、4年生 10 名

記載日:2025 年 1 月 26 日(日)

FD 委員:渡瀬享子

この授業の紹介をお願いします。

メディア、大衆文化、表象といったキーワードへの多種多様な関心をもった学生が集まってくるゼミです。卒業論文の研究対象は、アニメ、漫画、児童書、映画、テレビ、アイドル、広告、ネット配信、SNS、演劇など多岐に渡ります。

読む(テキスト)・集める(資料)・編む(議論の場、発表ツール、卒業論文)とともに作るという側面をのばすために、「#読んでみっちゃログ」という大学生協の本棚プロデュースを続けています。これらの一連の営みを活性化するために「考える」というゼミ生の能動的なかわりを誘発したいというコンセプトで臨んでいます。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

身の回りに、また自分の生い立ちのなかに、卒論のテーマがたくさんあるのだということを知ってもらうためにメディア論や表象論があるのを理解してもらうことを重視しています。問題意識はぐくみテーマを見つけるうえで、いかに他者の問題意識に関心をもてるかということを意識するように伝えています。そうした他者への関心がめぐって、自分の問題意識をより明確にまた深化させる過程が演習という形式なのだと考えています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

まず第一に、講義で修得したメディア論的なモノの見方をより磨き身に着けてほしいと考えています。それを実現するために、基礎的なメディア史的知識、基本的な資料の収集方法と取り扱い方を習得することが目標です。3年生は教科書的なものを読み、次に学術論文を読み論文の形式を知る、そして自分のテーマを発表するという流れです。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

問題意識や気づいていることがあってもうまく言語化できないという局面が多々あります。若者ゆえに気づくこともそのなかに多々含まれています。SNSのこと、アニメのこと、アイドルのこと、際限なくひろがるポピュラー文化について、つまり教員が教えられることばかりです。そうした立場から学術的な関心を質問をしてあげることで、比較・考察への動機が強くなるが多々あります。そこから、資料を探索・収集の楽しみに気付くというチャンネルがうまく機能することを意識しています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

各自の研究対象が様々なので、先行研究など専門性の高い資料の探索は、各自の主体性を原動力とするところが大きいです。そこが難点だと思います。ゆえに、次に何をすべきかということを、発表者は毎回発表のあとに振り返りをおこない、具体的な資料収集と整理の目標を立てるようにしています。また議論においては、メディア論、表象論の見方を持ち込んだらどのように、ゼミ仲間のテーマについてコメントできるのかという問題意識を共有するようにうながしているつもりです。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

レジュメも卒論もですが、ゼミマニュアル(ルール)と個人的な声かけの両方がうまく連動したときに、学生のスキルが上がる人が多いような気がしています。また、「#読んでみっちゃログ」では、先輩をみながら制作をし、その制作を後輩が見るというバトンリレーが仕掛けられています。それにより、書籍へのコメント力、紙面の構成力ともに全体的な底上げがじりじりと続いていると思っています。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

学科内でも人気が高く多彩な興味関心を持つ学生が集まるゼミです。メディア、大衆文化という華やかで楽しそうなイメージが先行しますが、ゼミの学習は専門的で方法論など基礎的なことを徹底して教えている印象です。学生たちに自分なりの見方で社会を捉え自分の言葉で表現させるという最も大切な能力(研究のみならず、社会に出て生きていくためにも大事な力だと思います)を身につけさせるためには、課外学習などゼミとはちょっと違う学習活動や、視野を広げるための教員の関与が大事になってくるとことを学びました。学生の潜在能力を引き出すためには教員も常に学んでいなければならない、学生や学問に対しては謙虚でいなくてはならないという姿勢は、どの分野の教員にも当てはまることだと思います。

[法学部1年次におけるゼミの実践例]

近藤卓也 准教授(法学部法律学科)

担当「法学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」履修者:1年生9名

記載日:2025年1月14日(火)

FD委員:齋藤友美子

この授業の紹介をお願いします。

本演習は法学部法律学科1年生向けの必修科目であり、これから法学を学ぶ者にとって必要な知識と技能を習得することを目的としています。具体的な授業内容としては、法学の基礎知識のほか、法令・判例・文献の調べ方をはじめとするリーガル・リサーチの方法を教授します。また、グループ・ディスカッションやディベート、判例報告といったかたちで、アクティブラーニングの手法を積極的に採用しています。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

新入生がこれから充実した大学生活を過ごせるように、受講者間の交流が深まることを重視しています。科目の性格上、法学学習に必要な知識のレクチャーは欠かせませんが、このような情報伝達型の授業はともすれば一方的な講義形式になりやすく、受講者間の交流を図ることができません。そこで、グループ・ディスカッションのように学生同士が対話する時間を必ず設け、受講者自身が考え意見を交換し理解を深めつつ、良好な人間関係が形成できるように工夫しています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

科目の性格上、条文の読み方、六法の使い方、判例の読み方、データベースの使い方、文献の引用方法など、法学学習で必要となる知識・技能は身に付けてほしいと思います。また、法的・論理的思考力やリーガル・マインド(法的なものの考え方)などの法学部生ならではの能力、さらには、コミュニケーション、ディスカッション、プレゼンテーション能力など、今後社会で活躍するうえで重要となるスキルも習得してほしいです。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

受講者に「授業が楽しい」と思ってもらうことが、授業への参加意欲ひいては学習意欲の向上に繋がると考えています。そのため、実際の授業でも教員1人が淡々と説明をするのではなく、クイズや雑談をはさんだり、受講者同士の意見交換の時間を設けるなど、飽きさせない授業設計を意識しています。また、裁判傍聴といった課外活動も実施しています。実際に法が運用されている現場を目にして座学では得られない経験をすることで、法学学習に対する意欲向上を期待しています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

受講者と教員間での信頼関係の形成に腐心しています。例えば、第2回の授業までに受講者全員の顔・氏名を覚えるようにする、課題を課すうえでは本番前に授業外で個別指導を実施する、(もちろん任意参加ですが)4・8・2月などの節目ごとに親睦会や打ち上げを企画するといった工夫をしています。これらの取り組みを通じて受講者と良好な関係を築くことで、受講者のニーズを踏まえた授業が実施できると考えています。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

個人差はあるものの、全体的に文章力や論理的思考力の向上が挙げられると思います。その他、あくまで個別事例にとどまりますが、もともと人前で話すことが苦手だった受講者がディベートや判例報告を通じて自信をもって自分の意見を発表できるようになったケース、本演習をきっかけに法学学習に強い興味・関心を抱くようになり当初の希望進路を変更して法学研究科への進学を志すようになったケースなどがあります。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

従来行われてきた FD の対象は、ほとんどが講義形式の授業であり、ゼミ形式の授業についての FD はあまり行われてきていません。その理由は、FD の必要性がないことにあるのではなく、FD の難しさにあると考えられます。すなわち、ゼミの内容や性質は非常に多様であり、学部、分野、教員のほか、制度、伝統、校風などによって、千差万別となっています。また、大人数の講義とは異なり、人目に触れる機会が少ないということや、少人数の対面教育では、教員の生き方や人間性に影響を受けやすいといったゼミの特性がその要因として挙げられますⁱ。

しかし、大学のカリキュラムは学年が進むと、講義形式からゼミ形式の授業へと段階的に移行し、最終的にはゼミが大学での授業の中心になるように設計されていることから、ゼミの重要性は明らかであり、またその教育的効果についても異論の余地がありません。したがって、上述したようなゼミの多様性等から生ずる FD の難しさはあるにせよ、同一大学・学科など類似する条件下での教員間で実践の交流を図り、それを通じて一人ひとりの教員が自身の指導法について再考する契機となるような FD がなお求められていくべきであると考えられます。

本記事では、法学部法律学科 1 年次の配当科目である「法学基礎演習 I・II」を取り上げました。法律学科では、2025 年度からの新カリキュラムで「法学総論」が廃止されることになったため、同科目の内容の一部を「法学基礎演習 I・II」に移行させるための参考資料がとりまとめられました。また、2024 年後期からは、近藤卓也先生が中心となって法学基礎演習・意見交換会が任意参加の形で開催されています。

「法学基礎演習 I・II」のディプロマポリシー・到達目標は、①法的な問題点を抽出し、法令を解釈・適用するための基礎的な技法を身につけていること(DP2 技能)、②他の参加者と議論をしながら、協働して法的問題の解決に向けて取り組む姿勢を身につけていること(DP4 コミュニケーション力)、③法的問題への関心を持ち続け、より良い社会の実現に向けて行動する姿勢を身につけていること(DP5 自律的行動力)であるとされています。このうち、②の DP4 コミュニケーション力が特に重視されていることから、この点について以下若干の考察を行ってみたいと思います。

ところで、ゼミでは、一般的な内容として、テキストの購読を行うものと、研究テーマについて報告を行うものがありⁱⁱ、運営方法として、グループ活動か個人の活動かに大別されます。今回紹介した近藤先生のゼミ(以下、本演習)は、法学の基礎知識の教授およびディベートや判例報告などを内容としています。そして、上記②との関係では、グループ活動を取り入れている点が注目されます。

グループ活動のメリットとして、ゼミを運営する上で合理的であるということのほか、ゼミの共同体としての性格を強め、それにより授業への満足度や学生生活そのものへの満足度を高めているということが指摘されていますⁱⁱⁱ。しかし一方で、グループ活動に教員が適切に働きかけなければ、消極的なメンバーに他が追従するマイナスの同調が生じたり、報告を他人任せにする学生が出るなどの問題を生ずる恐れがあります。また、例えば年間を通じてグループで一つのテーマの研究を行うような場合には、年次途中でグループ内での仲間割れやトラブルが発生すると、授業自体が成り立たなくなる恐れがあるため、グループのメンバーを決定する方法にも注意を払う必要があります。

本演習では、新入生が充実した大学生活を過ごせるようにとの配慮の下、学生間の交流が重視されています。この交流は、授業の中では、グループ・ディスカッションなどの学生同士が対話する時間を設けることにより、行われています。一方で、全体の学習意欲を高めていくために、クイズを取り入れた解説を行ったり、課外活動を実施するなど、さまざまな工夫が施されています。また、学生と教員の信頼関係の形成が積極的に行われており、こうした関係性もグループ活動を成功させるための下地となっています。

グループ活動を取り入れるかという問題は、教員が学生との関係を良好にできるか、あるいは教員に人間観察能力があるかというような教員の得手不得手にもかかわるところであり、グループ活動があれば必ずしもゼミが活性化するというものではありません。しかし、ゼミでのグループ活動を通じて仲間と話し合ったり、協力して研究を進めていくことは、学生のコミュニケーション力や学習意欲の向上に資するだけでなく、大学生活における貴重な経験となりうるものです。本演習は、こうしたグループ活動を成功させるために、教員がどのような点に留意すべきか、また具体的にどのような工夫ができるかということを参考にする上で、意義のある実施例であると考えられます。

i 毛利猛「ゼミ形式の授業に関する FD の可能性と必要性」香川大学教育実践総合研究 15 巻 1 頁(2007)参照。

ii 横浜国立大学経済学部監修・宇多賢治郎『論文作成のためのパソコン入門』11 頁(学文社、2008)

iii 毛利・前掲注 1・3-4 頁。



【スポーツのリアルな現場で学生の主体的な学びを促進する】

豊田 直樹 准教授(地域創生学群地域創生学類)

担当「ゼミ」履修者:3年生12名、2年生14名

記載日:2024年12月16日(月)

FD委員:寺田 千栄子

この授業の紹介をお願いします。

この授業では、スポーツマネジメントの理論をリアルなビジネスの現場で実践的に学ぶことを目的として実施しています。実際のスポーツチーム(ボルクバレット北九州、九州電力キューデンヴォルテクス)をフィールドとし、マーケティング戦略、ファンエンゲージメント、スポンサーシップ、イベント運営などに実践的に取り組みます。実際のスポーツビジネス課題に取り組むことで、問題解決能力やクリティカルシンキング、それに必要なコミュニケーション能力が養われると考えています。また、ゼミは学年を縦断的に取り組むことで、学生同士の学び合いの機会を増やし、研究の継続性を高めるだけでなく、実践的なスキルや人間関係の構築にも役立っています。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

実際のスポーツの現場を知り、学生自身に楽しんで取り組んでもらうことを重視しています。ゼミでは、スポーツチームの選手やスタッフ、関連企業、報道関係者など多くの関係者とのコミュニケーションをとりながら実践を行なっていきます。このような方々と交流することで、スポーツマネジメントの仕事の実態やキャリアパスを具体的に理解した上で、どのようなスキルや経験が求められるのかを実践的に学び、自身のキャリア設計に活かせると考えています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

この授業では、スポーツチームだけでなく、大会への参加など多様な現場での実践を行なっていきます。スポーツのリアルな現場を理解することを通じて、マーケティング・スポンサーシップ・データ分析・マネジメントスキルなどスポーツビジネスに関するスキルを身につけてほしいと思っています。

また、現場にはたくさんの関係者が存在します。そのため、他者と良好な関係を築き、円滑にコミュニケーションを取るためのスキル(People skill)を獲得してほしいと思います。それぞれの立場や専門性が異なる方との交流を通じて、単なる「話し方」や「社交性」だけでなく、相手の気持ちを理解し、協力しながら物事を進める能力、振る舞い方などを体験的に学んでほしいと思っています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？

重視している点は、ゼミ教員が学生とたくさんのコミュニケーションをとる点です。教員がゼミ生と積極的にコミュニケーションをとることで、学びの質の向上、モチベーションの向上、キャリアサポート、ゼミの活性化、学生の成長促進など、多くのメリットがあるように思います。特に、スポーツマネジメントのように実践的な学びが重要な分野では、教員が業界のリアルな話を共有し、学生の考えを引き出すことが、深い学びにつながっています。

また、前述したように学年縦断的に活動に取り組むことを通じて、学生同士の意見が活発に交流され風通しの良いゼミ環境が生まれています。共通の目標や課題に向けて協力しやすくなるため、チームワークの向上にも寄与しています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

この授業には、「スポーツが好き」という気持ちで集まってくる学生が多い反面、学群全体のカリキュラム体制などの課題もあり専門的なところまで深く学べないという点が課題であると感じています。また、スポーツ関係以外の就職をする学生も多いので、幅広い学びを提供できるよう工夫しています。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？

学生にも意識して伝えている People skill の獲得について、大きな変化を感じます。現実の社会での学びを通じて、コミュニケーション能力、協調性、感情のコントロール、交渉力、柔軟性などの力が養われています。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

この授業の取材を通じて、次のようなFDに関する知見を得られた。

1) 実践的学びの効果

地域のスポーツチームやイベントとの連携を行うことで、リアルな課題解決を体験し学んでいくPBLの効果が得られるよう工夫がなされていた。理論だけでは得られない実践的な知識が身につく、学習効果が高まっているものと考えられた。加えて、実際のスポーツイベント運営やマーケティング活動を通じて、現場のリアルな状況を理解することを通じて、体験を伴う学びが学生の記憶に深く残り、将来的な実務に直結する効果があると考察した。

2) 学生主体の学びの促進

ゼミでは学生が主体的にプロジェクトや調査に取り組まれており、アクティブ・ラーニングの効果が実感できた。学生が自ら課題を発見し、解決策を探るプロセスを通じて、深い理解と定着が促進されている。また、ゼミ教員からのフィードバックがリアルタイムで行われるため、学生は自身の学びを即座に振り返ることが可能となる。これは、学生のモチベーション向上にもつながっているものと考えた。

3) 相互学習の効果

学年を超えたゼミ活動により、上級生と下級生が互いに学び合う機会が提供されていた。ゼミ教員が提供する指導だけでなく、学生同士の知識共有が深い学びに繋がることが期待される。スポーツビジネスや地域創生の課題に対して、異なる学年や背景を持つ学生が多角的な視点で議論することで、問題解決能力の向上にも寄与するものと考えられる。

4) 持続化な授業の設計

学年縦断型のゼミにより、活動の長期性や継続性が担保される設計がなされていた。短期的な成果に終わらない、持続的な学びの場を提供することにつながっている。また、ゼミ活動を通じて蓄積された知識や経験が次年度以降の学生に引き継がれる利点もある。

5) 教員のファシリテーション能力

ゼミ教員が単なる知識の伝達者ではなく、メンターのように学生の学びに伴走している点が印象的であった。学生の自主性を尊重しつつ、適切なタイミングで支援やアドバイスを提供することを可能にしている。また、学生一人ひとりのペースに合わせた指導と、全体の学びを促進するファシリテーションが実施されていた。

以上のように、このゼミから得られるFDの知見として、学生主体の学びの重要性、持続的な学びの環境デザイン、教員のファシリテーション能力の向上が挙げられた。特に、地域創生とスポーツビジネスというリアルなテーマを扱うことで、理論と実践の統合が可能となり、教育の質を高めるための示唆に富んでいた。これらの知見をもとに、他のゼミや授業にも応用することで、より効果的な教育の提供を行なっていきたいと考える。



【体験から学びへー学習としてのインターンシップー】

石川敬之教授、辻井洋行教授、中岡深雪教授、池田隆介教授(基盤教育センターひびきの分室)

担当「社会学習インターンシップ」

履修者:2年生4名、3年生4名、4年生1名

記載日:2025年1月10日(金)

FD委員:池田隆介

この授業の紹介をお願いします。

「社会学習インターンシップ」は、国際環境工学部の2年次以上を対象とした科目です。この授業は、インターンシップに参加した学部生が、その体験を通じて得た学びを、自らのキャリア設計の充実のために活用していけるようにすることを目的としています。この授業を履修するためには、インターンシップに参加することが前提となっています。国際環境工学部生を対象とする科目ですが、インターンシップ先の業界や業種は限定していません。世の中には様々な形態のインターンシップが存在します。学部生にとって就業体験の機会は貴重ですので、どのような体験であっても、それを自分自身の学びにつなげていくことが理想です。その学びの機会を提供することが、この授業の大きな役割です。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？

学生の体験を最大限に学びへ変換するための活動を取り入れることです。この授業では、自らインターンシップを体験すること自体が学習過程に組み込まれています。ただし、インターンシップも千差万別であり、当然、そこで得られる経験も人によって異なってきます。現場見学と説明、作業体験、ディスカッション参加、セミナー受講など、様々な形態のインターンシップがあります。アフターコロナの現在は、オンライン・インターンシップも一般的なものとなり、企業の所在地に関わらず参加できるものも増えてきています。また、民間だけでなく、商工会議所、NGO、行政機関など、さまざまな団体が就業体験の機会を提供しています。個人としても貴重な経験となるインターンシップですが、個々の経験を相互に説明し、共有する機会を作ることで、体験を学びへと進化させていくことを、この授業では重視しています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

実践的行動力と自己分析力です。まず、インターンシップをするには、自分で情報収集をしていくところから始めていかなければなりません。研修中のマナーや仕事の技能などだけでなく、どこでインターンシップを開催しているか、どのようにエントリーするか、いつインターンシップに参加すればいいかなど、研修前の準備の時点から自分で方法を模索していかなければなりません。上述したように、インターンシップは千差万別ですので、参加までの手順も人によって異なってきます。ですので、一般化できず不安なところもありますが、その不安な中でも行動を起こすことが重要です。また、インターンシップを個人的経験として完結させるのではなく、それが自分のどのような変化につながったのか、また、他の人の就業体験との違いや共通点は何かを考え、就業の意義やキャリアにおいて自分が重視すべきことが何かを分析していく力を伸ばしてもらいたいと考えています。何を重視すべきなのかは、最終的には、個々で違いますし、また、同じ人物でもタイミングによって異なってきます。就業後にあらたに自分のキャリアを見直す機会も出現するでしょうから、そのときにも生かせる自己分析力を培ってもらいたいと思います。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような活動を行っていますか？

就業体験のプレゼンテーションと報告書作成が軸となる活動です。プレゼンテーションでは、自分の就業体験を他の受講生と共有してもらいます。これにより、自らの経験を振り返り、整理しつつ、他の受講生の例も共有することで、自らの経験との相違などを把握することができます。そして、報告書作成は、個別課題ではなくグループワークとして実施されます。「インターンシップ体験を後輩に伝える」という前提で、報告書の協働作成を行います。次の世代に伝えるという目的を念頭に置くことで、体験から何を学べるかを徹底的に検討することを促そうと試みています。中には、インターンシップがあまりよい思い出になっていない受講生もいるのですが、失敗があったとしても、そこから学べることを見つけられれば、十分に後輩に伝える価値のある知見になります。逆に、貴重な勉強の機会があったと満足した受講生でも、それをそのまま繰り返すだけではインターンシップ未体験の学生には伝わらない恐れがあるので、どのように言うべきことを整理するのかを考えていかなければなりません。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

行動や分析を実際に体験するために、授業時間外にも積極的に作業を進行するための仕組みを取り入れています。報告書はグループワークとなるのですが、Teamsにチャットグループを設置し、受講生グループが、授業外でも報告書の企画、執筆、修正を進めることができるような場を設けています。また、評価の基準などはシラバスなどで事前に説明をしますが、作業中にあまり過剰に教員が介入しないようにしています。

実は、カリキュラム改編により、「社会学習インターンシップ」という授業名は 2024 年度をもって廃止されます。しかし、カリキュラム改編後も後継科目が予定されており、その授業でキャリアに関する体験をつうじて学びを得ていくというコンセプトは継承されますので、これまでの工夫で得られたことは活かしていきたいと思います。

得られた FD に関する知見について(FD 委員記載)

実験のような明確な「演習」ではありませんが、インターンシップをキャリア形成のための学びに転換していくというこの授業の狙いは、まさに受講生の実践がベースとなるものです。就業体験自体も当然のことながら、そのあとの、プレゼンテーションと報告書作成を通じた体験の分析と共有も、まさに、受講生の実践に相当します。ですので、この科目においては、このような演習的側面を重視していくことが不可欠となっていることが分かりました。

第5章

FD 委員会について

(1)活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた 3 つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動は以下の通りである。

研修 WG では、本学におけるアクティブラーニングの推進、事前事後学習の確保、教育アセスメントの実施を主な目的に掲げて、全学研修を 5 件実施した。①「春季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、4/4 開催）、②「夏季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、8/22 開催）、③第 1 回全学 FD 研修「大学教育における生成 AI 利用 実践編」（対象：全教員・必修、9/26 開催）、④第 2 回全学 FD 研修「8 つの問いから考える学習評価の改善」（対象：全教員・必修、遠隔オンデマンド方式にて 2 月に開催）、⑤メディア授業 FD 研修「情報社会への招待」及び「データサイエンス入門」（対象：指定した教員及び希望者、オンデマンドにて 11～1 月に実施）の計 5 件の研修の企画・実施を行った。これらの研修の報告は、第 2 章「FD 研修報告」を参照されたい。

FD 活動広報 WG では、FD 活動報告書の特集記事として他の教員の演習科目の実施方法を取り上げることと、演習科目を担当する教員へのノウハウの移転を促すことをひとつの目的に、各学部・学群で実施されている特色のある授業に焦点を当て、授業の位置づけや工夫について取材を行った。取材項目についても精査を重ね、より立体的に授業が理解できるような質問項目の設定をした。昨年度に引き続き、本学 FD 活動の学外への発信を意識し、「読み物」としての可視化・発信を意識した。関連して、FD 活動報告書の表紙および特集記事ではユニバーサルデザインフォント体を使用し、多くの人に読みやすい記事にすることを試みた。

授業評価 WG では、昨年度の授業評価アンケートの質問項目を元に、今年度も着実に授業評価を実施してきた。今年度は、各方面から寄せられた様々な意見や要望について、ワーキンググループ会議、および、FD 委員会で検討を重ねた。とりわけ、授業の満足度についての質問項目を対面の回と遠隔の回で分けていることの意義、集計データの母数を受講登録者数ではなく回答数にすること、などを話し合った。今後は、予算と技術的な可能性も視野に入れながら、具体的にどのような機能を授業アンケートシステムに付加してゆくべきなのかの詳細を詰めていく必要がある。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2)活動一覧

<FD 委員会>

日程	回	内容
4 月 24 日 (Web 会議)	第 1 回	【議題】 1. 委員構成について 【報告】 1. 2024 年度春季新任教員 FD 研修実施報告 2. 2024 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 3. 大学教育学会第 46 回大会について 【その他】 1. 2024 年度 FD 委員会開催予定 2. 2024 年度研修 WG の活動について
6 月 5 日 (Web 会議)	第 2 回	【報告】 1. 各 WG の進捗について 【議題】 1. 2024 年度 1 学期授業評価アンケート実施について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について 2. 図書購入希望について
8 月 28 日 (Web 会議)	第 3 回	【議題】 1. 2024 年度第 1 回全学 FD 研修実施について 2. 2025 年度 FD 活動の推進予算（案）について 【報告】 1. 2024 年度夏季新任教員 FD 研修実施報告 2. 各 WG の進捗について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について（再掲） 2. 図書購入希望について（再掲）
10 月 23 日 (Web 会議)	第 4 回	【議題】 1. 2024 年度 2 学期授業評価アンケート実施について 2. メディア授業 FD 研修実施について 【報告】 1. 2024 年度第 1 回全学 FD 研修実施報告 2. 各 WG の進捗について 3. 1 学期ピアレビュー実施報告 【その他】 1. 図書購入について

1 月 22 日 (Web 会議)	第 5 回	【報告】 1. 「ファカルティ・ディベロッパー養成研修会」参加報告 2. 各 WG の進捗について 3. 2025 年度 FD アドバイザーについて 【議題】 1. 2024 年度第 2 回全学 FD 研修実施について 【その他】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2. 年間ピアレビュー報告書の提出について 3. 2024 年度 FD 活動報告書の提出について 4. 2025 年度 FD 活動計画書の提出について 5. 2025 年度全学 FD 研修企画提案書の提出について
3 月 5 日 (Web 会議)	第 6 回	【議題】 1. 授業評価アンケートの項目変更について 2. 2024 年度 FD 活動報告について 3. 2025 年度 FD 活動計画について 4. 公立大学ガバナンス・コードにかかる適合状況の確認について 【報告】 1. 2024 年度第 2 回全学 FD 研修実施報告 2. 2024 年度メディア授業 FD 研修実施報告 3. 2 学期ピアレビュー実施報告 4. 各 WG の進捗について

< 研修・講演会等 >

日程	項目	講師等
4 月 4 日	春季新任教員 FD 研修	上月 翔太 (FD アドバイザー)
8 月 22 日	夏季新任教員 FD 研修	上月 翔太 (FD アドバイザー)
9 月 26 日	第 1 回全学 FD 研修 (必修研修) 「大学教育における生成 AI 利用 実践編」	森木 銀河 (九州大学 インスティテューショナル リサーチ室 学術推進専門員)
11 月 5 日 ～1 月 31 日	メディア授業 FD 研修	中尾 泰士 (基盤教育センター 教授) 池之上 正人 (基盤教育センター 教授)
2 月 3 日 ～2 月 21 日	第 2 回全学 FD 研修 (必修研修) 「8 つの問いから考える学習評価の改善」	上月 翔太 (FD アドバイザー)

(3)委員構成

2024年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員17名、アドバイザー1名で構成される。

役 割	氏 名	所 属	職 名
委 員 長	後藤 宇生	経済学部経済学科	教 授
副 委 員 長	狭間 直樹	法学部政策科学科	教 授
委 員	寺田 真一郎	外国語学部英米学科	教 授
委 員	胡 玉華	外国語学部中国学科	教 授
委 員	李 東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委 員	前田 淳	経済学部経済学科	教 授
委 員	市原 勇一（1学期）	経済学部経営情報学科	准教授
委 員	姚 智華（2学期）	経済学部経営情報学科	准教授
委 員	渡瀬 淳子	文学部比較文化学科・社会システム研究科	教 授
委 員	柴原 健太郎	文学部人間関係学科	准教授
委 員	齋藤 友美子	法学部法律学科	准教授
委 員	澁谷 壮紀	法学部政策科学科	准教授
委 員	寺田 千栄子	基盤教育センター（地域創生学群）	准教授
委 員	孫 連明	国際環境工学部情報システム工学科	教 授
委 員	白石 靖幸	国際環境工学部建築デザイン学科	教 授
委 員	藤田 俊	基盤教育センター	准教授
委 員	Danny Minn	基盤教育センター	准教授
委 員	池田 隆介	基盤教育センター（ひびきの分室）	教 授
委 員	松田 憲	マネジメント研究科	教 授
アドバイザー	上月 翔太	FD アドバイザー	講 師

2024 年度 北九州市立大学 FD 活動報告書
2025 年 3 月発行

編集・発行 北九州市立大学 FD 委員会

〒802-8577

福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号